

1. 開催概要

展覧会名	大阪市立美術館開館80周年記念 日本書芸院創立70周年記念 特別展「王羲之から空海へ 一日中の名筆 漢字とかなの競演」	
開催施設名	会期	入場者数
大阪市立美術館	平成 28 年 4 月 12 日～5 月 22 日	66, 921人
●開催概要 大阪市立美術館開館80周年、日本書芸院創立70周年の年に、王羲之から始める日中書法の歴史を、代表的な名品を中心に俯瞰するとともに、後進の作品制作や学術研究に裨益する展覧会を目指した。中国書跡は91件。うち台北・國立故宮博物院より19件、同・何創時書法藝術基金會より9件を借用し、本展の目玉とした。日本書跡は120件。うち国宝35件、重要文化財23件、重要美術品12件が含まれていた。さらに篆刻18件を含め、計223件を展示した。関西地区の書法展としては空前の質を誇る展示となり、予想を大きく上回る7万人近くの観覧者を迎えることができた。 書の専門誌『墨』(2016年5・6月号)は会場の盛況を伝えるとともに、「書道ファンや愛好家に裨益すること間違いなし…日中の書道史を彩る古典・古筆の傑作の数々をどうぞお見逃しなく!」と評した。また海外でも雑誌『典藏 古美術』(2016年4月号、台北)は「夢想般的中日法書盛典 A dreamlike display of Chinese & Japanese Calligraphy masterpieces」と称して特集号を組んだ。		

2. 美術品補償制度の活用による国民的利益に関する取組結果

・入場料の軽減 展覧会の入場料のうち、一般分(一般・高大生／当日・前売・割引)を各200円減額、特別観覧券(一般／高大生)を各300円減額した。これにより、想定以上の来館者を得られた。
・展示作品の質・量の充実 台北の國立故宮博物院および何創時書法藝術基金會から、日本初公開の質の高い作品を借用できたことにより、展示内容が格段に向上した。
・教育普及活動の充実 シンポジウムの開催 大阪国際会議場において大規模な記念シンポジウムを開催し、入場料を無料とした。入場者は予想を超える1, 207人であった。 学生向けの平易な解説リーフレットを作成し、無料で配布した。

3. 事故の有無(軽微な事故、ヒヤリハット事例も含む)

4月14日21時26分、熊本地方を震源とする大規模地震が発生した。大阪では全く揺れを感じなかったが、災害情報をテレビ等で確認、深夜のためとりあえず担当者から故宮書画処長と何創時主任研究員に大阪は無事の旨、LINE で一報した。翌朝、会場を確認し、作品や展示状況に一切変化ない旨、館からメールで故宮及び何創時に報告した。

4. 安全配慮に関する特別の対応

国立故宮博物院の作品の台北での陸送については、先方の指示と手配により、各車両に警察車両が伴走し、道路優先走行が行われた。何創時書法藝術基金會の作品の台北での陸送および両機関の作品の日本国内での陸送では、各車両に警備車両を伴走させた。

海外からの借用にあたっては、往復の輸送とも、大阪市立美術館学芸員ならびに貸し手のクーリエが随伴した。貸し手の館内(借受時)、大阪市立美術館(開梱時・梱包時)、貸し手の館内(返却時)で、大阪市立美術館学芸員ならびに貸し手の代表が相互にコンディション・チェックを行った。

文化庁審議員の指示に従い、水消火器を展覧会会場に配置、トイレ前防犯カメラ(ダミー)を増設するなどの改善を行った。

5. 紹介事例・今後の改善点等

本展では、王羲之～空海より連なる書法の伝承を、中国・日本それぞれの名品によって俯瞰する大規模な展覧会となった。さて、日本書蹟は国内に名品のほとんどが存在するが、中国書蹟の名品を揃えての展観となると、国内のみで陳列作品を集めるには自から限界がある。また、数限られる国内の所蔵品は、これまで幾度も展観されており、これだけでは内容的に新味のある展示にはなりえない。そこで、中国書蹟では質量ともに世界第一の所蔵を誇る国立故宮博物院から、宋の蘇軾・黄庭堅・米芾、元の趙孟頫、明の祝允明・文徵明など、いずれも日本初出品となる代表作をまとめて借用した。また、個人コレクションで、日本人にはまだほとんど知られていない何創時書法藝術基金會からは、明末清初の大作が来日することとなった。日本の収蔵品の欠を補って余りある傑作ぞろいで、展示の内容が格段に充実し、観覧者の耳目を一洗するに足るものとなった。

展覧会の主たる作品を海外から借用するとともに、国内からの借用作品の保険料も同時に軽減されることになるため、国内からの借用作品についても、一層の充実を図ることができた。今回の展覧では、国宝・重要文化財などを多数含み、保険料も高額になるため、美術品補償制度の活用価値は大きかった。ただし、古美術品の保険額は定めがたく、かつ所蔵者が多数に及んだため、各所蔵者との調整に非常に手間取ってしまった。国内作品に対する国家補償制度の適用はこれまでに例が少ないようで、売買取引のない国宝級作品の保険料の査定方法などについて、今後とも所蔵者と慎重に交渉を進める必要があろう。

国立故宮博物院より、温度 $21^{\circ}\text{C} \pm 1^{\circ}\text{C}/\text{日} \pm 2^{\circ}\text{C}/\text{月}$ 、湿度 $50\% \pm 3\%/ \text{日} \pm 6\%/ \text{月}$ 以内に保つことのほか、展示ケースの仕様や展示環境について数々の厳しい条件が求められた。展示ケースにはバリテックス構造を用いた特設ケースを設計し、事前に先方に赴いて協議をしたうえで製作施工した。また、本館の設備担当と連絡を密にして空調の調整にあたった。その結果、先方の要求値をほとんど超えることなく、安定した展示環境を保てた。

6. 展覧会の収支決算書

主催者名

大阪市立美術館、読売新聞社、公益社団法人日本書芸院

●収入

内 訳	決算額 (当初予算額)
展覧会収入・その他の収入	8945 万円 (6500)
共催者負担	2987 万円 (5500)
収入総額	11932 万円 (12000)

●支出

内 訳	決算額 (当初予算額)
企画準備等基本経費	5778 万円 (4733)
設営・運営等会場関係経費	6154 万円 (7267)
支出総額	11932 万円 (12000)